

足立秀樹(あだち ひでき)先生のプロフィール

あだち医院院長および日本漢方医学研究所付属渋谷診療所勤務。
医学博士(内科学)。

- 1975年 慈恵医大卒。以後、慈恵医大病院内科勤務。
- 1989年 山田光胤先生に師事、漢方修行を始める。
- 1991年 渋谷診療所およびあだち医院で漢方中心の診療を開始。
- 2003年 漢方友の会機関誌「活」編集長。
- 2004年 日本漢方医学研究所付属渋谷診療医局長。

専門科目・領域は漢方による一般診療(内科、外科、小児科、婦人科、皮膚科、整形外科、眼科、耳鼻科、心療内科などの諸領域を含む)および内科。

◆先生が初めて漢方と出会われたのはいつ頃ですか

1987年頃、再燃をくりかえすSLE、ネフローゼ症候群の方に
柴苓湯と桂苓丸を併用し、
ステロイドを減量・中止にもちこむことができた。
(この頃の私は漢方の門外漢で、石川友章先生のご示唆による
使用でした。)この経験が印象に残っています。



◆先生の御専門で漢方はどのような効果を発揮していますか

自分の専門は「漢方」だと思っています。もともとの専門である内科領域では、
漢方はほぼ万能といってもよいぐらいです。(もちろん西洋医学を併用することもあります)

◆普段の治療で漢方薬と西洋薬との割合はどれくらいですか

適応を吟味したうえで、ジギタリス、降圧剤、経口糖尿病薬、抗生物質、抗ウイルス薬などを
使用することもあります。これは一割以下だと思います。あとは漢方のみで治療しています。

◆10年後の漢方医療はどうなっている(またはどうあってほしい)とお考えですか

漢方だけでなく、日本の医療自体がどうなっているのかが、分かりません。
私自身は漢方治療を続けていることでしょう。

また、若い先生方への漢方医学の教育や研修のしきみを、
大学病院などの事情や西洋医学の考え方からは、一応、
独立した形で形成しておくことが重要だろうと考えています。



◆先生ご自身漢方を飲んで効果を実感なされたことがありますか

もちろんです。

◆これから漢方医を志す方に一言お願いします

漢方医学は西洋医学と違うところがありますが、素晴らしい医学です。家族や友人との縁を信じるように、ご自身と漢方医学との縁を信じてください。



◆漢方に関心のある一般の方に一言お願いします

西洋医学(あるいは近代文明)の骨組みは合理性、論理性です。とすれば、ある人間を「物質」として、あるいは「機能」として扱う傾向があります。

そのように扱われた人間が、それを「非人間的」と感じるのは当然ではないでしょうか。

経験医学である漢方は、その対極にあるといってもよいでしょう。漢方を実感するには、やはり漢方に造詣のふかい医師と縁をもち、具合の悪い時には相談してみてください。

自分の治療方針を「漢方だけ」あるいは「西洋医学だけ」などと敢えて絶対化するのはやめましょう。そういう「絶対化」は、漢方的ではないのです。

◆その他、ご意見ご感想などありましたらお聞かせ下さい

現在、検討されている東洋医学会認定専門医の規定変更については、多少の疑問をもっています。

たとえば、現在30代半ばで漢方を猛烈に勉強している先生でも、過去の勤務先病院の事情で認定内科医などをとるのが、すでに無理になっている場合、その先生の漢方の技量が十分であっても、今後は永久に東洋医学会の認定はうけられないことになります。

こういう理不尽はあってはならないと思います。



注意:先生へのインタビューは、当会が2004年5月に行った内容です。